「イヴァンさん、雨降ってたんじゃないですか？ 傘は？」
「ないよ」
あっさりと返された答えに、菊が呆れているかのような空気をわずかに滲ませる。確かに彼の髪も、まとっている薄手のコートも、僕のときよりもずっと水気を含んでしまっている。雨足も少し強まったのかもしれない。さぞかし冷たいだろうに、一向に気に掛ける様子も見せず、頬に貼りついた髪をかき上げている。
「お風邪を引いてしまいますよ」
小言めいた調子で菊が言い、水滴の落ちるコートを受け取るとハンガーに掛けて後ろの壁に吊るした。
「別に、そこまで寒くないよ。別に雨粒が凍りつくほどではないしね」
「…ふむ、それは確かに」菊が小さく頷いてみせる。それから、小さく首を傾げた。「最近お仕事はどうなんですか？」
「うーん、前と同じ。書いたりやめたり。ちょっと前に少し長いのを書いて、それからまだ次に書きたいことが見つかってない」

この男が、店の馴染み客の一人であることは間違いないらしい。男が――イヴァンはカウンター席の前を通り過ぎ、迷わずテーブル席へ歩いていった。壁に背を預けるように隅の椅子に座る。そこで目が合った。
「あー、心配しないでね。僕、別にここで賑やかで活気のあるお喋りを楽しみたいってわけじゃないからさ。君の時間の邪魔はしないよ」
片手をひらひらと振りながら、そんなことを言う。これはつまり、裏返せば、無駄に話し掛けて煩わせたりするなって言いたいんだろうか。こっちはまだまともに口を開いてすらいないのに、キャンキャン小うるさいかのように言われて、僕は憮然とした。
「気にしないことです」菊が慰めるような口調で言う。「この人ってどなたにも、いつでもこうなんです。しかもたちが悪いことに、こっちがあからさまに無視してもまるで気にしない」
「スタロヴァヤ、ある？ 料理はまだいいや」
まさしくその言葉の通り、会話の流れなどまるで気にしないといった調子でイヴァンに話を遮られ、菊はふうと溜息をこぼしてからカウンター内側の足